

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■ 第4章「東電の敗北」

「2号機、まだ状態が悪くなって

炉水位がタウシケル(下限値以下)になっています」。3月14日午

後11時半、東京電力福島第一原発免震重要棟の緊急時対策本部で発電班

の担当者が声を上げた。

数時間前に注水が可能になったはずの2号機は、逃がし安全弁(SR

弁)が閉じてしまった。炉内圧力が上昇して注水できなくなり、炉内の

水位も計測できないレベルまで下がっていた。

発電班の担当者は数分おきに2号機の原子炉水位、圧力、格納容器圧

力をテレビ会議で報告していた。「ドライフェル(格納容器0.7)

Ⅱ

緊迫する対策本部

格納容器圧力が7.0キゼン(0.7

メガゼン)になったという意味だった。最高使用圧力の5.8キゼンを大きく

超えていた。医療班の加藤由美子(37)には、詭

み上げられる数値の正確な意味は分からない。だが担当者の声の緊張感

と周囲の雰囲気から、状況が極めて厳しいことは理解できた。

「怖かったです。緊迫感が...もう本当に駄目になるかもしれないと

素人の私でも思いました」加藤の目線の先には、円卓に座る

所長の吉田昌郎(59)と第2復旧班長曳田史朗(56)がいた。

いつもおおらかな吉田は口づから所員の誰にでも声をかけた。「よ

格納容器破損の危機

前の日々を思い出していた。

加藤が以前、広報担当だった時、

「放射線で死ぬっていつかは、ど

原子炉の構造に誰よりも詳しい曳田

から、原発の技術的な知識をずいぶんと教わった。説明はいつも丁寧で

どつることもで 2人には子どもがいたはずだ。せ

きず、見たこともめて奥さんだけでも子どもどつ

ないほご険しい表に帰してあげられないか。

「死ぬかもしれ 器圧力がまた上昇した。

ない」。加藤は実 曳田は表情をゆがませた。そして

も同じことを考え もしもしこの事態を終わらせること

ていた。原子炉に ができるスイッチがどこかにあるほ

精通していた曳田 ら、自分が押しに行く。だと、そ

だからこそ、もう だから死んだって構わない。(敬称略。

い)格納容器が破 年齢、肩書は当時。共同通信 国分



遠隔操作のロボットで撮影した福島第一原発2号機の原子炉建屋と穹。中央部分の下に格納容器がある

2012年2月(東京電力提供)

ないと感じていたのだ。

とも...って」

対策本部を見回すと、壁際で肩を

寄せ合って眠っている復旧班の社員

だった。

「ドライフェル0.75」。格納容